

【ポスター発表】

**障害者就業・生活支援センターにおける精神障がい者のアセスメント実践活動と
個人要因および環境要因との総合的な関連についての検討**

○ 大阪市立大学大学院 青山 貴彦 (008675)

岡田 進一 (大阪市立大学大学院・001746)

〔キーワード〕 障害者就業・生活支援センター、精神障がい者、アセスメント

1. 研究目的

近年、精神障がい者の雇用が伸び続けている（厚生労働省 2017）。2018年には精神障がい者の雇用が義務化され、更なる雇用の増加が見込まれることから、精神障がい者の就労および職場定着の支援が、ますます重要になってくると考えられる。こうした状況下で、支援の中核的な担い手として、障害者就業・生活支援センター（以下、「就業・生活支援センター」とする。）への期待は大きい。期待に応え、求められる役割を果たしていくためには、精神障がい者に対する支援強化が急務である。

就業・生活支援センターにおける精神障がい者の支援を強化するためには、アセスメントの質を高めることが必要不可欠である（青山 2016）。青山ら（2017）は、支援担当者の具体的な実践活動に着目した量的調査を行い、その内容と構造、基本属性との関連について明らかにしたうえで、アセスメント実践モデルの開発を行っている。それを踏まえ、アセスメント実践の質的向上を図るための具体策を提示するためには、アセスメント実践活動を促進させる関連要因（個人要因および環境要因）について明らかにする必要がある。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点は、アセスメント実践活動に影響を及ぼすことが予測される個人要因（支援実践に対する意識や態度）および環境要因（職場環境に関する認識）に着目した量的調査を行い、その相互作用や相乗効果に着目しつつ、両者の総合的なアセスメント実践活動への影響について明らかにすることである。

調査対象者は、全国に所在する全ての就業・生活支援センター330か所（2016年10月末時点）の職員のうち、雇用安定等事業および生活支援等事業による配置職員とした。調査期間は、2016年11月24日から2017年1月15日までである。データの収集は、自記式質問紙郵送法で行った。調査票の回答数は463（回収率28.1%）であり、欠損値のない362票（回答数の78.2%）を分析に用いた。

分析方法は、探索的因子分析、共分散構造分析による確認的因子分析、個人要因および環境要因を独立変数、アセスメント実践活動を従属変数とする多重指標モデルに関する適合度の検討である。適合度指標には χ^2/df 値、GFI、AGFI、CFI、RMSEAを用いた。分析には統計ソフトSPSS23およびAmos23を使用した。

3. 倫理的配慮

回答は個人の自由意志であり、回答の有無によって不利益が生じることはないこと、得られたデータは厳重に保管・管理すること、回答は統計的に処理し、個人やセンターを特定できないようになっていること、研究以外の目的で使用しないことを調査票に明記した。返送をもって本調査への参加同意を得られたとみなした。なお、本調査は大阪市立大学大学院生活科学研究科の研究倫理委員会の承認を受けている（承認番号：16-32）。

4. 研究結果

個人要因は3因子（省察、積極的姿勢、批判的思考態度）、環境要因は2因子（上司や先輩からのスーパービジョン、同僚からのサポート）が抽出され、それぞれ構成概念妥当性が確認された。アセスメント実践活動の7因子（自己点検を踏まえた情報分析、日常生活・職業生活の遂行に関する情報把握、職場環境の情報把握、生活面の丁寧な情報把握、冷静な情報判断、不調時の状態・対処法に関する情報把握、ストレングスへの着目）を含めた多重指標モデルに関しては、一定の適合がみられた。個人要因とアセスメント実践活動との間で有意な関連がみられたのは、「批判的思考態度」と「省察」であり、それぞれ標準化係数は0.47、0.31であった。「積極的姿勢」と「アセスメント実践活動」には有意な関連はみられなかった。環境要因に関して、「上司や先輩からのスーパービジョン」と「同僚からのサポート」のいずれも「アセスメント実践活動」との間に有意な関連はみられなかった。「同僚からのサポート」に関しては、「省察」、「積極的姿勢」に影響を与えており、間接的な形で「アセスメント実践活動」に影響を与えていた。

5. 考察

批判的思考態度が、アセスメント実践活動に対して最も大きな影響を与えているということが実証された。批判的思考態度に関しては、その重要性を説く先行研究（村田2010；隅広2011；日和2015）はあるものの、特にソーシャルワークや職業リハビリテーションの分野において、その実践における具体的な効用について実証した研究は見当たらず、本研究の結果は新たな知見が得られたものと考えられる。

アセスメント実践活動と個人要因および環境要因との総合的な関連に関しては、「情緒的な支えを提供する『同僚からのサポート』や、相談できる、アドバイスがもらえるといった『上司や先輩からのスーパービジョン』が十分に提供される職場環境において、支援担当者個人として、『積極的姿勢』をベースに、『省察』および『批判的思考態度』を身につけ、意識的に実践することによって、アセスメント実践活動を高めることができる。」と整理した。積極的姿勢を基盤に、省察および批判的思考態度を実践することと、同僚からのピアサポート、上司や先輩からのスーパービジョンの体制を整えることが、アセスメント実践の質を高めるための両輪であり、その両輪を支える体制づくりが必要不可欠である。